

読み手に意図が伝わる論述の工夫を

— 実践報告を論文に引き上げるいくつかのポイント —

審査委員長
菊池 龍三郎

第35回教育弘済会論文審査を通して、審査委員から出された多くの感想の中から、教育現場で頑張っておられる先生方の今後の教育研究に役立つと思われるものをいくつか取り上げてみます。

1. 研究計画の基本にはしっかりした指導計画が必要

まず、研究のねらいに沿って着実に研究を深めている場合と、「研究のねらいと実践がずれてしまっている」場合があるという感想を取り上げてみます。

教育研究論文は、ふだん先生方が行う授業などの実践を離れてはあり得ません。審査委員会は実践報告であってもどんどん応募してほしいと呼びかけています。その理由は、私たちが望んでいるのは研究のための研究ではないこと、教育研究にかかわる論文は、ふだんの実践を離れてはあり得ないと考えているからです。ただし、教育研究論文は実践を踏まえていなければならないからと言っても、それでは実践報告ならどんなものでもよいかと言うと決してそうではないと思います。読み応えのある実践報告には、共通して、学校や先生方個人のしっかりした指導計画に基づいてなされているという特徴があると思います。

先生方は教科などの指導において、指導を通して児童・生徒にこうなってほしい、こんなことができるようになってほしいということを期待して指導計画を立てます。日々の実践はこの指導計画に即して行われます。実践がねらい通りの成果を収められるかどうかは、ひとつには先生方の指導計画がどのようなものかにもよると思います。児童・生徒の実態と課題を確実に捉え、その上でどう指導するかを観点やねらいを絞り、具体的にどうするかの手がかりをあれこれと工夫するのではないのでしょうか。この段階が大事なのだと思います。そうして具体的に指導案を作って実践に取りかかっていくわけです。

以上のような指導計画がしっかりできていることが教育研究でも大事なのではないかと。指導計画ができていれば実践報告であっても説得力があるのだと思いますし、それ自体ですでに教育研究論文に近いと言えます。

つまり、ふだんの指導計画が単にカリキュラムを消化するというのではなく、問題や課題の把握→対処→結果のチェック→修正というプロセスになっているかどうか、近年しばしば使われる言い方をすればPDCAサイクルを回していくという意識で貫かれているかどうか大事なのではないかと考えます。言い換えれば、研究の内容を形作る実践が、先生方のマネジメント意識で貫かれている研究、そして論文や報告は優れているとの印象を持っています。

2. 主題設定の理由→研究のねらい（仮説）→実践→検証の流れについて

さて、全体の研究計画の中で、実践の段階まではさまざまに工夫し、精力的に取り組んでいるが、検証の結果・成果をどう見るか、どう考えるかといった肝心のところになると、考察が研究のねらいから外れ、結果として検証と考察が甘くなっている場合もありました。これは実践研究を動かしていくマネジメントの問題です。上述したPDCAサイクルに即して言えば、結果・成果の考察に相当するC（チェック）の部分の部分を簡単に済ませないでほしいということです。このサイクルを言葉だけでなくしっかり回せるようになったら、もう研究は半分は成功です。

3. 論述における簡潔さと冗漫さー常に「ねらい」を意識しながら書く

これは自省を込めて言うことなのですが、論述に当たって参考にしてほしいことをいくつか挙げてみます。

第1に、常に何を明らかにしようとしているのか、何を改善しようとしているのかという研究の「ねらい」を意識しながら書いてほしいということです。そうすれば読み手は、文章も資料もつながりのあるひとまとまりのものとして読み取ることができます。

第2に、できるだけ簡潔に書く習慣をつけてほしいと思います。簡潔に書くには、主語と述語の関係がはっきりしている文章を心がけること、あまり修飾語を使わないことです。児童・生徒の様子、あるいは変化を述べる時などでも、例えば「大変に」、「非常に」、「とても」などの表現を多用することがあります。使う場合には裏付けを取るようにして、抑制的に述べるようにした方が、論述に説得力が出てきます。説得力があるスッキリした文章とは、読み手にとってもわかりやすい文章のことです。今年度の最優秀論文、優秀論文などは、いずれも言葉や概念を抑制しながら論述している点で評価できるものでした。

4. 仮説の作り方について

前提や仮説の中に明らかにしようとしている事柄が含まれているなど、述べてもあまり意味をなさない論述にならないように留意することも大事だと思います。よく使われる簡単な例を挙げて説明してみます。

- ① Aは嘘を言っていないと仮定する。
- ② Aが何かを話している。
- ③ 従って、Aが言っていることは本当である。

この①→②→③と続く論述は一見論理的なスタイルを取ってはいますが、直ぐにわかるように、Aが言っていることの真実性を証明した論述にはなってはいません。問題は、③の「従ってAが言っていることは本当である。」という命題の正しさを証明するのに、①の「Aは嘘を言っていないで本当のことを言っている。」という仮定を「真理」として受け止めることを読み手に期待していることに原因があります。そのため、この論述は、実際には「Aが嘘をついていないなら、Aは本当のことを言っている」ということを述べているに過ぎないわけです。このような堂々めぐりの循環論法、同語反復、あるいは論点先取と言われる誤りは、例えば、教育界で多く使われている「もしも〇〇ならば、△△であろう」と一見科学的なスタイルを装った「仮説」とか「研究の見通し」の中にもしばしば見られるものです。

研究のねらいや仮説で述べる用語を定義したり、説明しないで実践を進めたり論述するため、説得力が乏しい場合があるとの感想があったことも紹介しておきます。

5. 資料について

全体として資料は十分であったと思います。ただし、資料はたくさん使われているが不必要と思われるもの、出所が不明なものもありました。さらに写真についてですが、近年、デジカメで手軽に写真を撮ることができるため、豊富な写真を資料に付した研究論文が増えてきました。読み手の理解を深めるためには大事なことです。一方で、書き手にとって何よりも大事なことは、論述を通して読み手に伝える努力であることを指摘しておきたいと思えます。

先生方がふだん書いている実践報告を教育論文のレベルに高めていくことは決して難しいことではないと思います。しっかりした研究計画を立てること、計画に従って実践を進めると、結果についても多角的に検討すること、つねに裏付けを取るよう努めること、それら全体をきちんとマネジメントしていれば、それだけで研究論文の必要条件を満たしたことになります。あとは御自分の思考のプロセスが読み手にきちんと伝わるように論述のしかたを工夫すればよいのです。それだけで数段レベルアップすると考えています。